

巖谷小波の児童文学の文体について

— 文末と文長による分析 —

小 松 聡 子

1. はじめに

巖谷小波は、日本の児童文学の開拓者であり、明治時代の児童文学界の中心的存在であった。児童文学についての定まった概念など無かった時代に、彼は手探りで進みながら、自分なりの児童文学の概念や型を造っていったのである。また、彼が本格的に口語体で児童文学作品を書き始めた明治 25 年は、口語体はまだ確立されていたとは言えない段階で、各人が試行錯誤を繰り返しながら、より良い文体を探っていた時代であった。このような時代に、児童文学という新しい文学を口語体という新しい文体で書くには、今日では想像できない苦労があったと思われる。

私は、小波がそういう中でどのように自らの児童文学の文体を確立していったかを探りたいと思う。方法としては、文末と文長の分析を行なう事で、小波の文体の年度による移り変わりやジャンルによる差などを見つめる事にする。

2. 対象作品と作品分類

小波の口語体の児童文学作品を対象としたが、特に時期を前期に絞って、彼が児童文学作品に初めて本格的に口語体を採用した明治 25 年 1 月の『當世少年氣質』から 39 年までの間の作品の中から無作為に 47 作品を選んだ。また、比較のために、それ以前に書かれた彼の口語体の小説から『妹背貝』（注 1）と『ばアヤ！』（注 2）を選んで分析してみた。

さらに、文体を分析していく上で作品の内容の分類が必要であるので、対象作品を以下のように分類した。各々の分類に属する作品名、発表年を挙げておく。ただし、作品の量の統一などの問題から、分析を部分に限ったものには、その旨も記してある。また、原本を底本としなかったものにも注をつけた。

① 空想的物語

現実の生活の論理では起こり得ない話で、小波が創作したもの。

- M 25 - 阿房丸 (文長の分析は 1 ~ 3 回)
- M 26 - カバン旅行
- M 27 - 初午の太鼓・蠅と團扇・三角と四角
- M 28 - 日の丸・鳶ほりよりよ・大和玉椎
- M 29 - 土筆坊・盲目螢
- M 30 - 餅搗奴
- M 31 - 新八犬傳 (文末の分析は 6・8・11・15 回、文長の分析は 6・8・11 回)
- 閻魔と漣・焼芋と一寸法師
- M 32 - 木菌太夫 (文末の分析は 1 ~ 4 回、文長の分析は 1、2 回)
- M 36 - 兎の御使
- M 37 - 人形天皇
- M 39 - 天の白駒

② 日常の物語

現実の生活の論理に従いながら、現実の社会と人間を写實的に描いた作品で、小波が創作したもの。

M 25 - 當世少年氣質 (1 ~ 3、なお、ほるぶ出版の『名著復刻日本児童文学館第一集』に収められているものを底本にした。)

暑中休暇 (1 ~ 3)

M 33 - 鬼が城・渡舟錢・五位様・怪我兄弟

③ 外国の伝承文学の再話

外国の神話・昔話・伝説等の民衆が生み、語り継いできた話を小波が児童向けに再話したもの。

M 26 - 十二月の苺

M 28 - 三の願

M 29 - 星娘・小雪姫

M 35 - 鐵の大名・三ツの難題 (P 1 ~ 34 ㍷ 2)

④ 外国の創作文学の再話

外国の個人の創作文学を小波が児童向けに再話したもの。

M 25 - 極楽園 (1 , 4 ~ 6 回)

M 32 - 小人島 (P 1 ~ 33 ㉔ 4)

M 33 - 續法螺先生 (P 1 ~ 47 ㉔ 9)

⑤ 日本の伝承文学の再話

日本の神話・昔話・伝説等の民衆が生み、語り継いできた話を小波が児童向けに再話したもの。

M 27 - 桃太郎・玉の井・松山鏡

M 28 - 瘤取り・八頭の大蛇

M 29 - 鼠の嫁入

(以上の作品は臨川書店の『日本昔話』の複製版を底本にした。)

M 29 - 八咫鳥

M 30 - 羽衣

⑥ 歴史物語

歴史的な事件、人物について書かれた作品。事実に基づいた部分もあるが、小波の場合は、特に子供向けという事で面白くという事を第一に考え、事実でない事も含めている。

M 28 - 倭藤太

M 29 - 牛若丸

(以上の作品は『日本昔噺』の複製版を底本にした。)

M 30 - 八幡太郎

M 31 - 日吉丸・高千穂・木村重成

なお、年度によってジャンルの偏りがあるのは、小波が書いた作品が年度によってジャンルの偏りがあったためである。

3. 文末による分析

a 分析の方法

- (1) 文末の1単語を取り上げて、以下のようにまず大きく3種類に分け、さらに「一般的な文末」の中を3つに、「特殊な文末」の中を6つに分けて

分析した。

① 一般的な文末

ア. 動詞の終止形

イ. 形容詞及び形容動詞の終止形

ウ. 助動詞の終止形

② 特殊な文末

ア. 終助詞

イ. 終助詞以外の助詞

ウ. 名詞

エ. 副詞

オ. 活用語の連用形

カ. その他（活用語の命令形等）

③ 引用で終わっているもの（文が引用で終わっていて、文末語にあたるものがないものの事で、略して「引用」という事もある。

(2) 上の「一般的な文末」についてさらによくわしく分析するため、もう少し文末語にあたる部分を長くとして、後にある表4、表5のような項目に分けて分析した。表4は常体の文末を分類したもので、表5は常体・敬体をあわせて分類したもの（注3）である。

ところで、文末の認定については、今回は小波の切り方に従って、「○」のところまでを1文とした。

小波の「○」の打ち方を見ていくと、現代の基準とは異なっていると思われるところもある。しかし、小波自身が明治22年の小説『妹背貝』の「讀者心得」の中で、「此の小説は、句讀無くして讀めるものに非ず。乃ち、○三通りの句點を設けたり。一生懸命之に便る可き事。」と書いているところから、小波は意識して句読点を用いていたと思われる。又、小波は「言文一致に關する余の經驗（注4）の中で、言文一致の文が「冗長に流れ」て「無味乾燥になる」のをさけるため、「所謂『名詞止め』をして見たり、あとの動詞を畧してみたり、種々なる事をしてやった」と述べているので、終助詞以外の助詞や連用形等で止めてい

る文末も冗長に流されないうための工夫の跡と考えられる。従って今回は、小波の文の切り方に従って分析した。

b 分析結果と考察

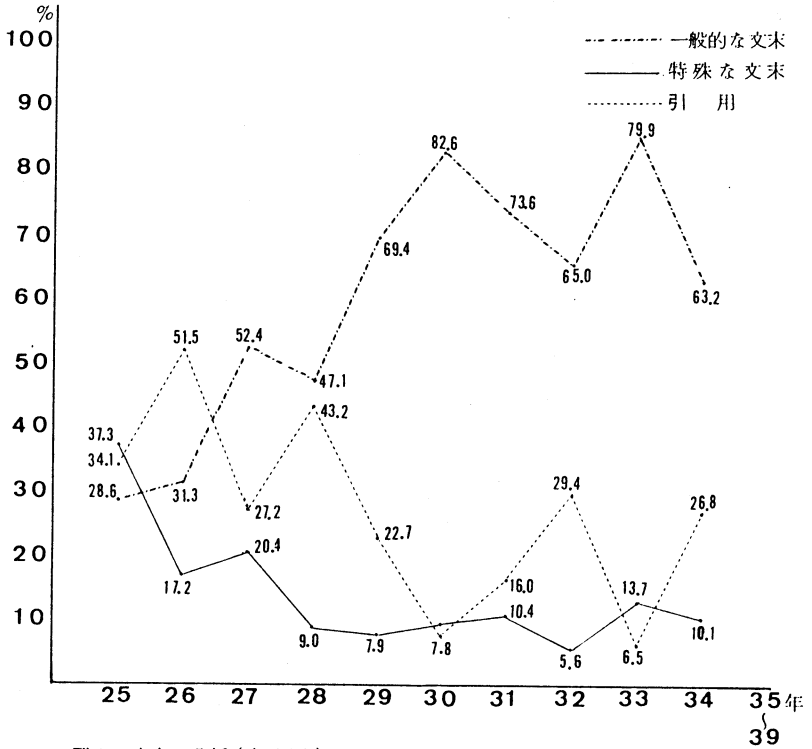


図1 文末の分析(年度別)

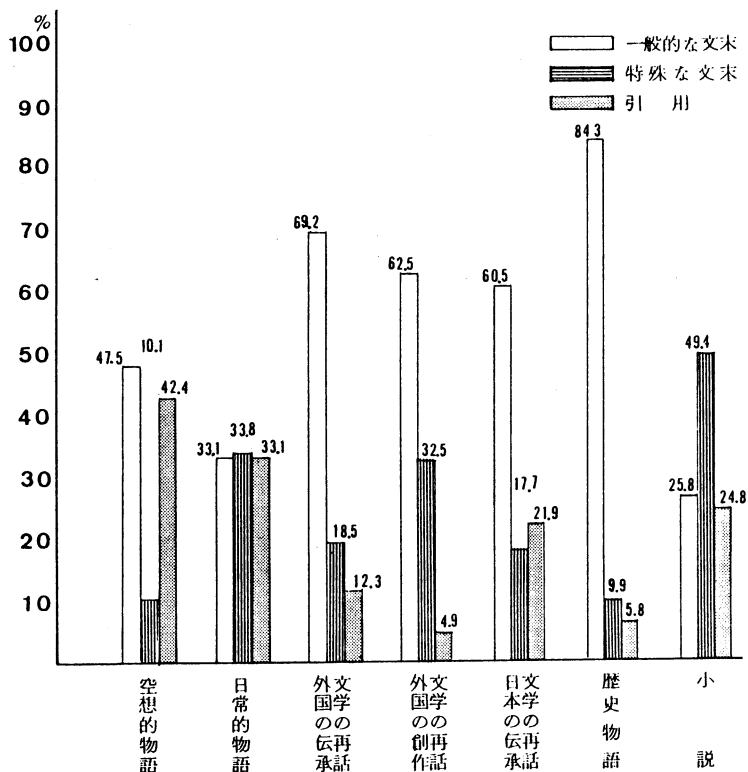


図2 文末の分析 (ジャンル別)

(1)の方法で47作品を分析した結果を年度別にまとめたものが図1、ジャンル別にまとめたものが図2である。図2の方には、比較のため、2章で挙げた小波の小説2作品のデータも入れておいた。

まず、年度による変化を示す図1を見ると、「特殊な文末」が明治25年～28年にかけて減少し、その後28年～39年まではほぼ一定の低い値を示している。

次に例文を2つあげる。例文1は明治25年の『當世少年氣質』、例文2は29年の『盲目螢』の一節である。

例文1 仲通りの骨董屋海野太平の悴に、小太郎と云ふ少年。生れ付て才氣人にすぐれ、殊に手の業に長けて、書を書くことに極て巧に。三歳の折いろはを書いて、隣家の隱居に舌を捲かせた位。其後小学校へ這入てからも、何くれの學課何れもよく出来る中に、習字のみは殊に秀て、土曜日毎の清書には、教師も朱筆を投じて驚く斗り。天神様の稚立か、羲之や弘法も斯うはあるまいと思はれるに、忽ち校中の評判者となつて、やがて神童と云ひ離された。(原文総ルビ。下線引用者)

例文2 まづある處、—其處には樹がコンモリと茂つて、水がチヨロチヨロと流れて居る處に、比加留大明神と云ふ神様のお社がありました。

此神様は螢の神様で、毎年夏の初になりますと、腐草から化けた螢が、みんな此處へ參詣をし、お神酒をあげたり、お賽錢をあげたりして、それから光明を分けて頂いて、初めて一匹前の螢になつて、ピカリピカリと光らせながら、方々を飛んで歩行くのです。

今年も春は過ぎて、夏の初めとなりました。(原文総ルビ。下線引用者。また、波線のところは、本文では繰り返し記号。)

一見してわかるように、25年の例文1は「特殊な文末」の多い文章で、29年の例文2は「助動詞」中心の文末である。

このように「特殊な文末」の値に年度によって差が見られると述べたが、今回の分析は25年～39年にかけての小波の全作品を分析したわけではなく、そのうちの一部を分析しただけなので、一部の作品にある傾向が見出されたからといって、すぐに小波の作品全体の文体の傾向に結びつける事はできない。そこで、統計的な検定を行なつて、作品全体についても同じ事が言えるかどうかを見てみた。

まず、「明治25年～28年までの『特殊な文末』の値は年度によって差はない。」という仮説をたてて統計的な検定(注5)を行なつた結果、0.1%の危険率で仮説は棄却された。つまり、「特殊な文末」の値の25年から28年の間の年度による減少は、作品全体についても同じことが言えるという結果が出た。

一方、28年～39年についても、「明治28年から39年の間では『特殊な文末』の値は年度によって差はない。」という仮説をたてて検定（注6）を行なった結果、仮説は棄却されなかった。つまり、28年～39年の間では、「特殊な文末」の値に年度によって有意な差は見られないという結果がでた。

この「特殊な文末」の比率の変化についてももう少し詳しくわしく見てみる。

表1 文末の分析 1 - 明治25年 -

単位 %

作品名	一般的な文末				特殊な文末						引用
	動詞	形・形動	助動詞	終助詞	他の助詞	名詞	副詞	連用形	その他		
當世少年氣質	2.2	0.9	18.3	3.1	21.0	19.7	0.4	13.5	1.3	19.7	
<日> 1月	21.4			59.0							
極樂園	5.2	0.9	30.2	0	24.1	9.5	2.6	13.8	2.6	11.2	
<外創> 3-5月	36.3			52.6							
暑中休暇	6.9	0.2	13.7	1.2	11.1	9.7	1.4	5.3	0.7	49.8	
<日> 9月	20.8			29.4							
阿房丸	0	0.6	50.8	2.2	5.0	5.0	1.1	5.5	0	29.8	
<空> 11月	51.4			18.8							
明治25年の平均	4.3	0.5	23.8	1.7	13.9	11.2	1.3	8.4	0.9	34.1	
	28.6			37.3							

<空> は空想的物語 <日> は日常的物語 <外伝> は外国の伝承文学の再話

<外創> は外国の創作文学の再話 <日伝> は日本の伝承文学の再話

<歴> は歴史物語 のことで、それぞれ作品のジャンルを表す。

表2 文末の分析 1 - 小説 -

単位 %

作品名	一般的な文末				特殊な文末						引用
	動詞	形・形動	助動詞	終助詞	他の助詞	名詞	副詞	連用形	その他		
妹背貝	4.3	2.5	23.1	2.5	11.9	20.2	0.4	7.2	1.8	26.0	
M. 24.8	29.9			44.0							
ばアヤノ	2.9	0.7	13.8	1.4	15.2	24.6	0	18.8	0	22.5	
M. 24.8	17.4			60.1							
小説の平均	3.9	1.9	20.0	2.2	13.0	21.7	0.2	11.1	1.2	24.8	
	25.8			49.4							

表 3 文末の分析 1 - 明治 29 年 -

単位 %

作品名	一般的な文末			特殊な文末						引用
	動詞	形・形動	助動詞	終助詞	他の助詞	名詞	副詞	連用形	その他	
星 娘	5.0	10.0	80.0	5.0	0	0	0	0	0	0
<外伝> 3月	95.0			5.0						
土 筆 坊	0	0	52.2	0	0	0	0	0	0	47.8
<空> 3月	52.2			0						
小 雪 姫	0	0	83.3	11.1	5.6	0	0	0	0	0
<外伝> 4月	83.3			16.7						
盲 目 蝿	0	0	38.6	2.3	0	0	9.1	0	2.3	47.7
<空> 6月	38.6			13.7						
牛 若 丸	0	2.2	82.2	2.2	2.2	0	0	0	0	11.1
<歴> 7月	84.4			4.4						
鼠 の 嫁 入	0	3.0	33.3	3.0	6.1	3.0	0	0	0	51.1
<日伝> 8月	36.3			12.1						
八 咫 鳥	0	1.7	91.5	0	1.7	3.4	0	0	0	1.7
<日伝> 10月	93.2			5.1						
明治 29 年の 平 均	0.4	2.1	66.9	2.5	2.1	1.2	1.7	0	0.4	22.7
	69.4			7.9						

表1は明治25年の作品の文末を分析したものであるが、1月に発表された『當世少年氣質』の「特殊な文末」の比率の合計を見ると、59.0%という高い値を示している。一方、表2の小説の平均の「特殊な文末」の比率の合計は49.4%で、『當世少年氣質』と同じように高い比率である。特に、書かれた時期に近い『ばアヤ!』は60.1%で、非常に近い値である。さらに、小説と『當世少年氣質』の「一般的な文末」と「引用で終わっているもの」

の比率を比べても、そう大きくは違わない値を示している。

これが、表1にある明治25年の3月～5月にかけて発表された『極樂園』になると「特殊な文末」の比率は52.6%となり、9月の『暑中休暇』では29.4%、11月の『阿房丸』では18.8%と明治25年の間でも月ごとに減少していつているのがわかる。

さらに、「動詞」・「助動詞」というような細かい項目ごとに見ていくと、25年～27年頃までは、比率の多少はあるが、表1にあるように「動詞」から「その他」まで各項目に分かれていて、多彩な文末の様相を呈している。そして、表2の小説データと比べるとわかるように、この傾向は自らの小説の場合と同じである。

ところが、28年以後になると、表3の明治29年のデータのように「助動詞」と「引用で終わっているもの」が中心のシンプルな文末に変わっていく。

以上の事は、実際に文章を見てみるとより理解しやすいだろう。次に挙げるのは小説『妹背貝』(M22.8)の一節で、常体の多彩な文末になっている。

例文3 此山から見れば、此の庭は大方一目。垣を越て隣の茶畑、それに續いて今を盛りの菜の花、大根の花。(中略)その間から萱ぶきの屋根と土藏の白壁が顔を出して居る。その左の端から遙かに見渡せる品川の沖か。日に映じて水銀を流したやうな海、遠く行く程靄に成て、安房上總の山々は、宙に浮いで雲と疑はれ。近くは沖を走る真帆片帆、家の屋根より高く見へて、空を飛ぶ鷗かとばかり。(原文総ルビ。下線引用者。)

また、先に挙げた例文1の『當世少年氣質』(M25.1)の一節も小説と同じく常体で、多彩な文末である。

それに対し、例文2の明治29年の『盲目蟹』の一節は、前にも述べたように「助動詞」中心のシンプルな文末になっている。

以上、文末を全体的に見てきたが、次に「一般的な文末」についてよりくわしく分析する。

表 4 文末の分析 2 -『當世少年氣質』と小説の比較-

文 末		作 品 名		
		當世少年氣質 M 25・1	妹 背 貝 M 22・8	ばアヤ! M 24・8
一 般 的 な 文 末	動 詞 + た	1 0. 0 %	1 2. 3 %	9. 4 %
	形・形動 + た	0. 9	0	0
	助 動 詞 + た	0. 9	0. 7	0. 7
	活用語+他の助動詞	6. 6	1 0. 1	3. 6
	動 詞	2. 2	4. 3	2. 9
	形・形動	0. 9	2. 5	0. 7
	計	2 1. 4	3 0. 0	1 7. 4
特 殊 な 文 末		5 9. 0	4 4. 0	6 0. 1
引 用		1 9. 7	2 6. 0	2 2. 5

表 5 文末の分析 1 -ジャンル別-

文 末		ジャンル						
		空想的物語	日常的物語	外国の伝承 文学の再話	外国の創作 文学の再話	日本の伝承 文学の再話	歴史物語	小 説
一 般 的 な 文 末	で し た	1. 2%	0. 3%	0. 7%	1. 9%	0. 7%	2. 4%	0%
	ま し た	2 0. 6	1. 3	3 8. 4	1 9. 3	8. 2	3 6. 2	0
	動 詞 + た	1. 7	1 2. 7	5. 5	9. 5	0. 2	7. 7	1 1. 3
	形・形動 + た	0	1. 0	0. 7	0. 4	0	0	0
	助 動 詞 + た	0. 2	0. 6	0	2. 3	0	1. 7	0. 7
	で す	4. 3	1. 2	4. 8	1 2. 9	5. 5	8. 5	0
	ま す	6. 7	0. 7	8. 9	3. 0	5. 3	9. 4	0
	です+他の助動詞	0. 6	0. 1	0	0	0	0. 2	0
	ます+他の助動詞	7. 0	0. 5	6. 2	7. 6	4. 9	8. 9	0
	活用語+他の助動詞	1. 7	7. 3	0	2. 3	0. 7	3. 4	8. 0
	動 詞	2. 8	6. 2	1. 4	2. 7	2. 2	4. 1	3. 9
	形・形動	0. 8	1. 3	2. 7	0. 8	2. 9	1. 7	1. 9
	計	4 7. 5	3 3. 1	6 9. 2	6 2. 5	0. 5	8 4. 3	2 5. 8
特 殊 な 文 末		1 0. 1	3 3. 8	1 8. 5	3 2. 5	7. 7	9. 9	4 9. 4
引 用		4 2. 4	3 3. 1	1 2. 3	4. 9	1. 9	5. 8	2 4. 8

まず、表4の各値を比べてみる。表4は明治25年1月の『當世少年氣質』とそれ以前に書かれた小説の「一般的な文末」をさらにくわしく分析したものであるが、近い値を示している。やはり、初めて本格的な口語体の児童文学作品を書くにあたって、それ以前に書いていた小説の文末をほぼ踏襲したということがいえるだろう。

表5はジャンル別にデータをまとめたものである。

日常的物語は「動物+た」・「活用語+『た』以外の助動詞」・「動詞」の文末が中心で、小説の文末に近い。他の5つのジャンルは、「ました」・「ます」・「ます+『た』以外の助動詞」が中心で、中でも「ました」が一番多い。特に、外国と日本の伝承文学の再話と歴史物語は「ました」の占める比率が高く、「ました」中心のシンプルな文末という印象を受ける。

c ま と め

明治25年に初めて本格的な口語体の児童文学作品を書く際、小波はこれまで書いてきた口語体の小説の文末をほぼ踏襲したということが言える。名詞止め、及び終助詞以外の助詞や活用語の連用形等で終る省略法などを多用した、変化に富んだ多彩な文末を踏襲したわけである。

そして、その後次々と作品を発表していく中で、自らの児童文学にふさわしい文末を探りながら、28年頃には、彼の小説とは違った、児童文学独自の「助動詞」の文末と「引用で終わっているもの」中心のシンプルな文末を確立していった。さらにくわしく見ていくと、「ました」・「です」・「ます」等が、その中でも特に「ました」が中心になっていった。

このようにしだいに敬体の文末が中心になっていくが、この敬体の文末は背後に語り手の存在が強く感じられる。つまり、読者に向かって語りかける「語りの文体」の性格が28年以後強くなったといえる。

最後に、ジャンルによる違いをまとめる。まず図2を見るとわかるように、空想的物語と日常的物語は「引用で終わっているもの」の割合が高くなっている。つまり、テンポのある会話にするために、地の文をつけないで会話の引用だけを並べる場合が多いという事である。

一方、他の4つのジャンルは「引用で終わっているもの」の割合が低く、「ました」などの助動詞中心のシンプルな文末になっており、日常的物語などよりは「語りの文体」という感じを強く受ける。そして、中でも特に歴史物語はこの傾向が顕著である。これらの傾向については、やはりこれらのジャンルが他のジャンルより「語りの文体」を要求したからであろう。

4. 文長による分析

a 分析の方法

次に、文長による分析に移りたい。

今回は、次の3種類の平均文長を出してみた。

- ① 全文の平均文長
- ② 純粹の地の文(引用を全く含まない文)の平均文長
- ③ 引用を含んだ文の平均文長

なお、文長は文節(注7)をもとにして計った。また、1文の認定の基準は、「文末の分析」のところで述べた基準に従った。

b 分析結果と考察

表 6

ジャンル	平均文長
小波の小説	(文節)
純粹の地の文	14.2
引用を含んだ文	14.7
全文	14.6
小波の児童文学	
純粹の地の文	16.7
引用を含んだ文	23.7
全文	19.7

表6は、小波の小説における平均文長と児童文学における平均文長のデー

夕をまとめたものであるが、児童文学の方が3種類の平均文長ともすべて長くなっている。特に、「引用を含んだ文の平均文長」が23.7文節と非常に長くなっているのが特徴である。

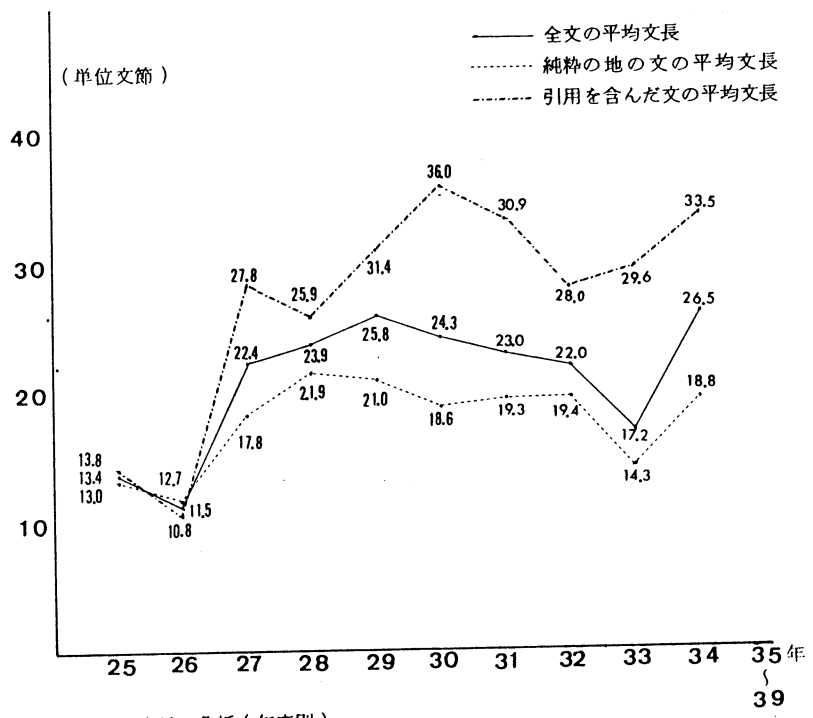


図3 文長の分析(年度別)

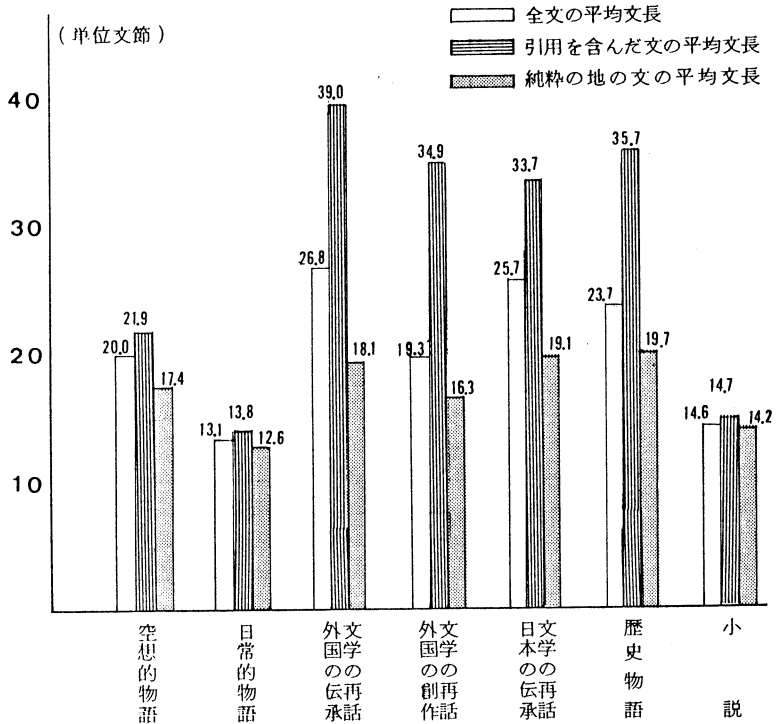


図4 文長の分析 (ジャンル別)

次に、平均文長の年度による変化をしてみる。図3は、3種類の平均文長を年度別にまとめてグラフにしたものであるが、明治25年～26年の頃は平均文長が「地の文」・「引用を含んだ文」・「全文」とも短く、値が接近している。ジャンル別にまとめた図4の小波の小説の値と比べても短めである。

例文1の明治25年1月の『當世少年氣質』の文章を見ても、「仲通りの骨董屋海野太平の粹に、小太郎と云ふ少年。生れ付て才氣人にすぐれ、殊に手の業に長けて、書を書くこと極て巧に。三歳の折いろはを書いて、隣家の隠居に舌を捲かせた位。」というように短文を重ねてリズムをつくっている

事がわかる。

また、「引用を含んだ文」も次のように短いものが多い。例文4は明治25年9月の『暑中休暇』の一節で、息子が父親に友人と水泳に行く事を許してもらおうとしている場面の会話である。

例文4 父はやがて静に、

（それは行てもよいが……）

めめた！ とやゝ胸も落付く。父は又、

（然し誰と行く？）

（入江さんと。）

（入江へ遊泳げるのか？）

（えゝ！）

（處は何處だ？）

（兩國です。） （原文総ルビ）

このように、テンポのある、生きた会話文にするために、他の文のついていない引用だけの文を並べる形が多く見られる。

ところが、これが27年以後になると、図3を見てわかるように、文長が長くなっている。「地の文の文長」も長くなっているが、特に「引用を含んだ文」が長くなっているのが目立っている。

次の例文5は明治27年の『松山鏡』の一節であるが、2行目の「成る丈」以後、最後の「計りです。」まで、3つの引用をつなげて1文にしている。

例文5 ですから立て行く男も、跡に残る妻や子も、中々安心は出来ません。

『成る丈早く歸つて来るが、留守は何分頼んだぞよ。大切の娘に怪我させてくれるな！』と夫が云へば妻は又、『随分道中氣を付けて、お身を大切に遊ばしませ！又御用が濟み次第、一日も早く御歸りを！』と流石は夫婦の情愛で、はや両眼に涙を浮べましたが、其處へ行ては小兒は邪氣のないもの、つひ隣村へでも行くかの様に、別段悲しさうな顔もせず、『阿父さん音無くして待て居ますから、何卒お土産を買て来て頂だい！』と甘へながら袂にすがる計りです。 （原文総ルビ）

次にジャンル別に文長を比較してみる。図4を見ると、日常的物語が最も短く、「地の文の文長」も「引用を含んだ文の文長」もともに短いのが特徴である。前にあげた例文1が日常的物語の地の文の例で、例文4が引用を含んだ文の例であるが、ともに1文が非常に短い。そして、この日常的物語が小波の小説の文長に最も近い値を示している。

図4にもどると、空想的物語が日常的物語に次いで文長が短い方である。

それらに対して、外国や日本の伝承文学の再話と歴史物語は、「全文の平均文長」がそれぞれ26・8、25・7、23・7文節と非常に長くなっている。「地の文の文長」も長めであるが、特に「引用を含んだ文の文長」が、39・0、33・7、35・7文節と非常に長いのが特徴である。

外国の創作文学の再話は、「引用を含んだ文」は同じように長い、その数が少ないので、「全文の平均文長」はこの3つのジャンルより短めになっている。

c ま と め

始めは児童文学作品も、小説と同じように、短めの文を重ねた、軽快で、テンポのある文章であった。自らも述べているように(注8)、冗長になるのをさけたためと思われる。「引用を含んだ文」を見ても、引用のみの文が多く、実際の会話に近いテンポであった。

しかし、明治27年頃から後になると、「地の文」が長くなって、節が連続と続けられて、連綿と続く息の長い文章になってきた。1文中の引用の個数も増え、付いている地の文も長くなり、「引用を含んだ文」も「地の文」と同様に連綿と続いて、実際の会話のテンポからは速くなっていった。そして、全体として、じっくり読者に向かって説明し、語り聞かすという文章になっていった。言ってみれば、小説とは違う、小波の児童文学の文章独自の1つの特徴が表れてきたわけである。この文長の変化は、文末の変化と深く結びついていると考えられる。

また、ジャンル別に見てみると、この語り聞かすという傾向が特に強いのが、外国や日本の伝承文学の再話と歴史物語である。

5. おわりに

これまで見てきたように、小波の児童文学の文体は、明治27年～28年頃を境にして、それまで書いてきた自らの小説に近い文体から児童文学独自の「語りの文体」へと変化している。では、この変化の原因は何であったのだろうか。

小波は、始めから児童文学作家を目指していたわけではなかった。始めは小説家として出発したのであるが、少年少女を主人公とした小説が多かった事などから、博文館の依頼を受けて児童文学を書き始めたのである。そして、27年7月から『日本昔噺』のシリーズ(全24巻、博文館)の刊行を開始し、児童文学に本格的に取り組むようになる。さらに、同年12月には博文館の編集部に入り、同館の児童雑誌「少年世界」の主筆になり、翌28年1月「少年世界」が創刊されると、以後毎号巻頭に作品を発表するようになった。つまり、始め小説家を目指していた小波が、27年の頃に児童文学作家として立つ事を決心したわけである。始めは小説に近かった文体から徐々に変化してきて、27年～28年頃を境にして児童文学独自の文体を確立していったのは、こうした事と深く関係があると思われる。

最後に、今後に残された課題についてまとめて、本稿を締めくくりたい。

今回は、具体的なデータを基にして文体を分析していく方法をとったが、このように具体的な数字としては表しにくい項目にも注目しなければならないと思う。語句に関しては、俗語・掛け言葉・洒落・漢語・擬声語・擬態語等。その他、比喩等の表現にも注目すべきであるし、話の構成・視点や文の種類(描写・説明等)の分析も重要である。

また、小波と同時代の他の児童文学を書いている作家についても文体を分析していく必要がある。そうする事により、小波の文体の特徴もより明らかになるであろうし、明治時代の児童文学の文体の全体像もつかめるだろうと思われる。

注1. 明治22年8月刊の『新著百種』（吉岡書籍店）の第4号所収。今回は教育出版センター発行の復刻版によった。

また、文末は「春」と「秋」の章のみを、文長は「春」の章のみを分析した。

注2. 明治24年8月刊の『新著百種』の第17号所収。同じく復刻版による。作品全体を分析した。

注3. 常体のものと敬体のものを分けて表にしたかったが、両方が混ざっているものもあって分けられなかった。

注4. 「新公論」19巻4号（M37・5）所収。

注5. カイ二乗検定を行なった。図1の結果については、前半は減少し、後半は一定の低い値であるという事をはっきり証明するために検定を行なったが、他の文長等の分析結果については、結果がはっきりしているので検定は行なわなかった。以下、検定に用いたデータを挙げておく。

	M 25	M 26	M 27	M 28
特殊な文末	357	17	79	27
その他の文末	601	82	307	251

注6. 同じくカイ二乗検定を行なった。以下、検定に用いたデータを挙げておく。

	M 28	M 29	M 30	M 31	M 32	M 33	M35~9
特殊な文末	27	19	11	38	10	36	23
その他の文末	251	223	104	330	170	227	205

注7. どのように文節を切るかで文長が変わってくるので、文節の切り方の規定を述べておく。

① 形式名詞、補助用言、またはそれに準じる語の前で切る。

その／まま こう／いう

② ただし、補助動詞の中でも、一般に動詞の連用形について、尊敬や謙讓の意味を表す補助動詞と言われているものは、独立性を失って、前の語に付いて複合動詞を形成していると見る。

申す・申しあげる・給ふ・なさる・奉る等

- ③ 並列されたものや繰り返されたものは切り離す。ただし、熟合したものは一続きとする。

いつも/いつも 有名無実の

- ④ 助詞が省略されたと見られる場合は、助詞があるべき所で切る。

力/あまって

- ⑤ 接辞的成分(または造語的成分)と結びついているものは切り離さない。

5人以上で 暑中休暇に

- ⑥ 全体で1つの単語と認められるものは切り離さない。

なんとなく はっとする

- ⑦ 語形の融合しているものは切り離さない。

いってる

- ⑧ ある擬声語・擬態語を1語とするか、2語以上とするかは、次の基準による。

(ア) 「——と」の形のもは1語とする。

(イ) 間を空けて書いてあるもの、読点で区切られているものはそこで切る。

(ウ) 一続きに書いてあっても、「AAAA」・「AABB」・「ABAB」の形のもは、「AA/AA」・「AA/BB」・「AB/AB」のように切る。

(エ) 「AAA」及び「ABC」の形のもが一続きに書かれている場合は切らない。

(オ) 「AAAAAA」などのように一続きに書いてある場合は、「AA A/AAA」のように切る。

[規定の③～⑦は、市川孝氏の『国語教育のための文章論概説(S53. 教育出版)のP225～226の文節の切り方の規定を参考にさせて頂いた。]

注8. 注4の「言文一致に関する余の経験」の中で述べている。